
精霊の守護者

きー子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の守護者

【Zコード】

N8211Y

【作者名】

きー子

【あらすじ】

精霊を崇拜する眷属 精霊種の台頭によって人類は衰退した。だが、人類は滅びてはいなかつた。精霊種への復讐を誓い牙を磨く人間が、今宵もまた跳梁跋扈する。しかし同時に、精霊に与する人間もいた。

「聞きたまえ精靈^{くそつたれ}の犬口諸君！ ここ神都港は我々が占拠した！ 繰り返す！ 神都港は我々 反乱軍が全面的に占拠した！ 人質の命が惜しければ直ぐ様に武器を捨て、此方の要求を聞き入れたし、繰り返す」

海を背にしてスピーカー越しにがなり立てる男の声が、延々と響いていた。夕焼けの空、飛び交う鳥、太平洋側に面した瀬戸内海の果て無きとさえ思える程に蒼い海 そんな港の情景を一瞬にしてかき消してしまいかねない程の無粋。

彼らが語るところの犬つころ いわゆる憲兵 であるところの石動源治は、空を仰いで大いにため息を吐く。緑色の古ぼけた外套を着こむ姿、その年の功は四十を越えるか否か。憂いと艶みを湛えた、顎鬚付きの面相である。石動は、耳が長くなかった。背丈が一メートル弱しか無いというわけでもなければ、奇妙にすんぐりとした筋肉質の体躯を誇るわけでもなかった。彼は人間であった。

この日本にそれほど多くは残されていない、人間であった。

石動は煙草の煙を空に向かつて吐き出し、傍らの部下からの報告を受ける。

「現場の状況について報告させて頂きます。首謀者はどうやら“反精靈”を掲げる政治組織“人類進歩同盟”的者である模様。おおよそ五十人が立てこもり、港を占拠。大方は避難を済ませましたが、それでもいまだ建物内には二十人程度の人質が取り残されている様子です。ヤツらは各人が重火器を所持しています。現状の憲兵隊が救出を敢行したとして、事態の打開は困難なものと“精靈庁”は見られております」

「二十人？ そんなに少なかつたか。斥候が見間違えたんじゃないだろうな」

「申し訳ありません。訂正します。二十人の人質と十人ほどの人間

です」

「脳天をブチ抜くぞ」

石動は傍らの部下を一瞥して、灰色の煙を吐き出すのみに留めた。部下は野槌ノームであった。灰色の髪の少年の様な風貌は、これでとうに成人済みだというのだから頭が痛い。何も人間に人権が存在しないというわけではないが、それでも人間以外の種族 精靈を神と仰ぎ、事実この国の頂点である皇スマラギを精靈へとすげ替えた“精靈種”達は、押しなべて人間の存在を軽視しがちだ。

「……となると根比べか。港の周りに警備の目を走らせる。一般人も一切近づけるな。外部との連絡を繋ぐ協力者がいるはずだ」

「いえ、それが

少年の様な部下の甲高い声が、石動へと言葉を続けかけたその時だつた。

不意に、男の後ろ側から、脇をすり抜けるようにして 黒死くろくめの人影が現れた。

それも、ふたつ。ぬるりと闇を滑るかのように現出したそれらは、石動に背を向ける形で、水平線の方角へと視線を固定したまま言葉を紡ぎだす。

「安倍エー。どう? 現場確認できた?」

「喧しい。ついさつき式を打つた。暫し待て」

若々しい声色。少年、少女のそれ。黒死くめはまじまじと見れば、漆黒に染め上げられたかのような狩衣。あまりにも目立ちすぎる衣装に身を包んだ姿が、当然のように石動の眼前でたたずんでいた。

「 な

ぽろりと、石動の口端から灰が零れ落ちる。開いた口がふさがらぬかのように、そのまま煙草も重力に引かれていく。

「なんだ お前たちは。この一帯は、一般人は」

一般人は立入禁止にしているはずだ。石動はそう言いかけて、口をつぐむ。こんな格好をした一般人がいてたまるものか、そんな思いが胸に去来しただらうことは想像に難くない。

「あつれえ」

驚愕を露わに、声を荒げる石動の様子を見とつてか。黒い狩衣の片割れ、長身の少女がとぼけたような声を上げて振り返った。向き直りざま、棚引くように揺らめく鮮烈な金髪はロングのストレート。彼女の衣装に真っ向から反抗するその色彩も、適切に飾り立てればどこぞのおてんばな令嬢と言つて通じるだろつ。

少女の青い瞳が石動の相貌へと近づく。石動はその人間離れした美貌に、すぐさま木霊ヒルフを連想したが、盗み見た耳朶は人間のそれだ。

「憲兵に連絡いつてないのん？ ハー。情報系統ちゃんとしてよね。日曜日なのはわかってるけどさあ」

彼女は文句を垂れながらオーバーな動作でため息と落胆を示して、肩を落とした。大げさにがつかりしてみせた後で、ニッコリと満面の笑みを忘れぬ辺りにたちの悪さがうかがえる。

残念な美少女だ。

石動は率直にそう思つた。

「隊長、途中ながら連絡を」

「なんだ」

観察の最中に挟まれる声が、思考への耽溺を中断する。思えば彼は何かを言いかけ、そして言いそびれていたはずであつた。後に回す道理は無い。石動は素直に部下の言葉へと耳を傾ける。

「こ」のたびの案件は彼らに委任されました。当部隊はサポートに徹します。“精霊庁”の達しでは、可及的速やかな解決を要するとの事です」

「理由は？」

「不明です」

「そうか」

わけも分からぬ命令の変更。職務もろくに果たせぬ罪悪感。このような、ほんの十代半ば程にしか見えない子どもに危険を晒させなければならぬ自分。世界は不条理に、石動の心中は不甲斐なさに

満ちていた。吐き捨てるよつて殴打ちを噛み殺しながら肩をすくめて、向き直る。

相も変わらず素晴らしい笑みを見せる少女がそこにいた。聞いての通りだとでも言つみうに石動は港の方向を顎で示す。好きにしろ。半ば諦めに近い感情がそこには込められていた。

「芦屋。人質の居所が確認出来た。倉庫に押し込められている。見張りは交代で張っている程度だ。どうにでもなる」

もう一人の黒死くめが、少女へと声をかけた。彼女と同様の黒い狩衣、その背丈は少女を下回ってしまうほどの中年。真っ黒な短髪は影と色が変わらないほどで、若々しい顔立ちにはしかし生氣と言うものが一切漂つていなかつた。

少年は空より飛来した鳥をその手で迎えると なんと彼の手中で、鳥は真っ黒な紙へと変じた。否、本来あるべき姿へと舞い戻つたのか。眼前のあまりにも不可思議な現象に、石動は口を挟むことすら出来ない。

「りょーかい。ゴーゴー！」

緊張感の欠片すらも見られない、いかにもお軽い調子で少女が少年に応えて、歩みだす。けむにまかれたような心地する石動は、しかし最後の気力を振り絞つて 「待て」とひとたび彼らを静止した。

「なんですか」

少年が振り返り、答える。その声には感情の起伏がほとんど感じられず、声色といったものさえ希薄に思われた。

石動はただひとつ、問いを投げかける。

「おまえたちは、何だ」

少年は、少女は そんなことか、と。

眉ひとつも微動だにせず、あっけらかんと答えを返した。

「陰陽寮、仙山博士、安倍公房」

「役職同じいーべ。仙山博士、芦屋満ですッ！」

計画は順調であった。神都港の占拠は滞り無く完了。何者にも遮られる事は無い。各所の入り口は組織の人員によって封鎖し、突入していく憲兵隊は漏れなく蜂の巣に出来るだろう。それに加えて港のあちこちには、各種ブービートラップを張り巡らせておいた。これで外部の連絡さえ繋がれば、なにもかも抜かりはない

占拠騒ぎの首謀者、河原崎荘司の現状の見立ては、そんなところだった。

つい先ほどまでは、そのように思われた。

だが目の前には、看過しがたい現実が突きつけられている。容赦のない選択肢。どちらが正解なのか、それとも正解など存在しないというのか

河原崎は“反精霊”を掲げる組織の人員達を神都港埠頭に寄り集め、その決断を下すこととした。男たちは各自が一様に、それぞれの銃器を手に携えている。

「……崎サン、なんすかコレ」

「箱だ」

「いや、それはわかるんですけど」

「……箱だ」

箱であった。

いやに大きな箱であった。

果たしていつに運び込まれたのかは定かではないが、気づいたときには一辺が一メートルにも及ぶであろう立方体の木箱が、この港に存在していた。すぐに降ろされるはずの積み荷だったのだろう、倉庫から発見されたものではない。その辺に転がされていたとしても語弊が無いほどに、何気なく所在していたその箱は

今、河原崎の目の前に厳然とした存在感を保っていた。

「罠、つて可能性もあるツスよね」

「当然だ」

そうでなければ、河原崎も迷いはしない。

河原崎は組織の中でも年長者にあたる。組織の“反精霊”に燃える熱意を持った構成員達は、その概ねが若い二十代の男たちで占められており

その二倍近くを生き、面相に皺も浮かび始めた河原

崎には、一種独特的の風格が湛えられていた。

その風貌は、しかし目の前の不審な箱へと意識を集中している。奇妙だ。例えばこれが敵対勢力から送り込まれてきた罠であつたとして、あまりにも露骨すぎる。ただでさえ警戒態勢と言える状況で、こんなものに誰が手をつけるというのか。

河原崎は決する。

「開け」

罠ではない。そう踏んだ。例えば爆発物が詰め込まれているとして、隙間から潮風の吹きこむような木箱を誰が用いるというのだろう。河原崎の命に従つて、組織の若衆が木箱の密閉をこじ開ける。蓋に相当する板を取り去ると、自然に内側を覗くことが出来よう。

瞬間、河原崎は皿を剥いた。

「おっ」

若衆が感嘆に似た声を上げる。無理もない。

大きな木箱の中に収められていたのは、ただの箱にすっぽりと収まってしまうほど、幼い少女の姿であつたのだ。それも飛びつきに美しい娘。絹糸のようなプラチナブロンドのロングは、流麗とすら思わせるそれ。フリルとレースが華美なほどにまであつらえられた白の装束^{トレス}は、相応の家柄を想起させてもなんら不思議ではない。

無遠慮に観察を続ける河原崎は、しかし不意に眉根をよせて皿を止めた。

「耳長か^{エルフ}」

侮蔑の色合い。蔑視。悪感情をふんだんに振りかけられた視線が、少女をやおら眺め続ける。

「小さいな」

「こりゃあ良いところの娘さんだわ」

「耳長でも特に別嬪ツスね。崎サン、どうしますコレ」

河原崎はその言葉を受け、ふむと首を捻つた。浮かぶ選択肢はいくつも存在した。

殺せ。

それが真っ先に候補としてあげられたが、同時に却下された。犯して殺せ。これが良い、そう思つたがしかし短絡的に過ぎるとも思う。河原崎はつとめて理性的に、自らの“反精靈”思想をおさえて考へる。

「今は捨ておけ。だが、いざれ役立つかもしれん。早急に身元を明らかにしろ。それによつて処遇を決める」

「なるほど」

「では、倉庫にでも放り込んでおきましょうか」

「その方がまとめて監視出来るツスね」

口々に様々な咳きを漏らしながらも、素直に年長者への同調を示す男たちを河原崎は見回す。

「否」

不意の否定の言葉に、ひとたび周囲へと緊張が走り抜けた。道理で考えれば、若衆に間違いはなかつた。無かつたはずだ。少なくとも彼らはそう考へてゐる。ならば一体何が年長者の不服を買ったといふのだろうか。 河原崎は重々しく口を開いて、答える。

「籠城戦だ。場合によつては長引くことも考へられる。時には慰安も欲しくなるだろ？……といつわけだ。必要になるまで
彼は口端を悪辣に吊り上げ。

その娘を指さした。

「それはお前たちにくれてやる。好きにしろ」

一瞬の、時の停滞。それを隔てて 男たちの歓声が沸いた。 「さつすが崎サン話が分かるウ！」などと離し立てる声まで上がる始末。そんなやり取りを知らずして、場の中心に居座るがままの少女はすうと小さな寝息を立てて眠りこけるばかりだった。賑やかな声に紛れて 唐突に紛れ込む。

空気をつんざくような銃声。男らの一人が機銃掃射を行つたのだ。その時すでに、河原崎は銃口が向く先へとその視線を辿らせている。その意はすなわち 何者かの存在を気取つたということに他なら

ない。

「やつたか」

神都港各所に設置されたままとなつてゐるコンテナには、死角となる影がいくつにも存在する。それは占拠を行つ際のゲリラ戦において大いに役立つたが、しかし同時に攻め込まれる時の盲点にもなりうるということである。穴だらけになつたコンテナは、しかしその影に隠れるものがどうなつたのか　　といつ事實を物語らない。

「否ツ」

河原崎が吼え、刹那の後に男たちは一斉に銃口をかかげた。狙いはコンテナの影から飛び出したひとつの中の黒い影。金色の髪を波のように揺らがせ、疾走と共に地を並行するその有様は暗夜においてあまりにも鮮やかだ。

その影を追うようにばら撒かれる銃弾の雨。　否、実際には追いかけているのではなく、取り残されていると言うべきか。尋常ならざる速度での疾駆を見せるその姿は、とても銃弾で捉えられる代物ではなかつた。正確に狙いを定めたとてすでにその姿はなく、移動速度を鑑みて着弾地点をずらしたとしても、その身は風のように弾丸をすり抜けてしまう。

人影　少女の口元の紅ルージュが、ニヤリと笑みを刻んだかに見えた。

それに応ずるかの」とく河原崎は一転、かかげた銃口を下げ箱の内側へと向ける。吐き出す言葉はすでに決まりきつた口上のように。

「ここには人質がいる。止まなければ、ますぐ撃つ。三つ数える間に止まれ」

その言葉を聞き止めると同時に黒い影の少女、芦屋満はすぐさまぴたりと静止した。どうやら彼女は銃口の前に堂々と身を晒すことにして、一片の躊躇すらも見せていない。

「あーもお。ここにも人質とかきてないよ。やんなつちやう」

ハー、と芦屋は大仰にため息を吐きながら両腕を天に掲げた。かと思えば後頭部に手のひらを回す様にして、くねくねと身をくねら

せた。魅了でもするつもりか、ふざけた女だ。河原崎の脳裏にそのような脳裏が去来したのは、おそらく仕方の無いことだろう。

「それ以上に近付くと撃つ。目的は何だ」

「あーい。目的？　言わなきゃ わかんない？」

「ふん」

河原崎は鼻を鳴らした。決して、少女の気の抜ける様な聲音のせいではない。

常人離れした身のこなし。無謀にも思われる単進行。そして夜の暗闇にあつてなお何よりも目立つ黒の狩衣。

「知つてゐるぞ。陰陽寮　精靈庁でも特に腕利きの荒事処理屋。存在しないはずの第五実働部隊。追われし皇のため尽力すべき貴様らが、新たな頭に擦り寄るとはな。精靈の犬にも劣る人類の背徳者よッ！」

「ふーん。この占拠も人間のためとか思つちゃつてる系？」

「無論。……忘れるなよ小娘。人質の命は私の手中にある。ひとたび合図をすれば、別に捕らえた人質もまとめて吹き飛ぶぞ」「人に銃口突きつけていまさら脅迫も無いじゃんね」

芦屋はそう言いながらも余裕を保つ。反して脅迫している側の河原崎、そして男たちには 些かならぬ緊張が垣間見られた。異形の力を持つた存在が眼前にあり、そしてそれには銃弾も通じるかどうか、果たして定かではないのだ。否が応でも彼らの集中は今、芦屋満その人へと完全に集約されていた。

ズドンツツツツ！！！！

さながら直下化型の爆撃。それが巻き起こつたのは遠方、即ち倉庫が存在するはずの方角であつた。

芦屋満へと注意が引きつけられていたがゆえか、完璧に予想外の出来事へと直面した男たちは 愕然とした気持ちを隠せぬまま、意図せぬ内に音のした方へと視線を向けてしまう。一時的に男たち

の注視を逃れた芦屋は、しかしニヤリと口端に笑みを浮かべた。

「やーつと来たか」

安倍公房は倉庫の見張りを粗方ぶちのめした後、各種符術を用いて倉庫に爆発を起こし、その壁を強引にこじ開けた。こりでもしなければ、安全な地帯まで逃げ出すには時間が掛かりすぎたのだ。ともすれば不意にアサルトライフルを構えた見張りに鉢合わせないと限らない以上、回り道は死に相当すると言つても良い。

「皆さん、一塊になつて行動してください！ 絶対に集団からはぐれないように！ この穴を真っ直ぐ、同じタイミングで憲兵の方々が突入する手筈です、そちらに保護を求めて下さい！」

陰気な声をしかし精一杯に張り上げながら、老若男女ことじとく連れ行く少年。人質の中には人間から精霊種まで、さまざま。木エ^{ルフ}靈、野槌^{ドウツ}（ノーム）、一鑓^{ハーフリング}、童子^{ハーフ}。彼らの中には乱暴を振るわれたのか、怪我を負つたものも少なくない。安倍は彼らを引率しながら、不意に空を仰いだ。暗闇に光振りまく夜の蝶。芦屋の式だ。安倍が手に掴み取ると、それはすぐさま紙片の形に転じる。

『こつち ひどじち ひとり できれば はやめ』 拙い言葉の群れから大様の意味を掴み取ると、安倍は憲兵隊と合流後にその身を切つて返す。

芦屋の所在はすぐさま見れた。銃声が弾けるように響きわたつているのだ。その音の大本を探れば知り得ぬはずもない。して、芦屋満は あらゆる角度から様々の銃口を向けられたまま、仁王立ちしてそこにいた。

「芦屋！ 人質はツ！」

「親分ぽいのが持つてきやあがつた！ 追つかけて！ アタシはこいつらゼーンぶ片付けてかなきやダメだかんね！」

「了解ツ」

安倍は何の心遣いもせず、否、ひとかけらの心配もせずに芦屋の脇をかけてゆく。当然だ。心配をするような道理が無い。

通りすぎてゆく間際。そんの一刹那に、芦屋は動いた。さながら千里も一步で渡るかのような歩みが男たちとの距離を一瞬にして詰め、拳の一撃で抉り倒す。比喩ではない。文字通り　掠めただけの拳の一撃が男の頬を抉り取っていた。同時に背後から降り注ぐ銃弾の雨あられを、振り返ると同時に少女の細腕が振るわれる。かきん、と。まるで硬質な金属でもぶつけたかのような音色[ガ]が響いた。

傷つかない。

芦屋満は、“銃弾程度”では傷つかないのだから。心配をかける道理など無きに等しかつた。ゆえに自分がなすべきことをするために　安倍はすぐさまに式を打つ。索敵。あらゆる隠れ場所を余さず見透すために。一匹の鼠すらも逃さぬよつこ。

「な

索敵結果。海上。少女を抱えた人影は海上にあり。それが間違いのないものであるならばと、安倍はすぐさまに船舶の停留する岸壁際へと疾駆ける。

「　く、はははッ！　遅かつたな陰陽寮！！」

気に障る声だ。安倍は眩きながら、水平線を視界に捉える。果たして非常用のためにと用意されていたのであらう船舶は、すでに沿岸部を離脱してしまつていた。

「見ての通りだ、私は逃げ出す！　こつまで瓦解してしまつては計画はままならん、選りすぐりの者連れ、また一からやり直せせて貰うさッ！」

聞いているのか、聞いていないのか。安倍は脇目も振らずに目を切つて返すと、一直線に波止を駆け抜けて遠ざかる船舶を睨めつける。否。見据えているのは　男がその腕に抱えた姿。眠りこけるがままの、エルフの少女の姿に他ならない。

「では、去らばだ。　くははッ！」

河原崎は、その腕に抱えた少女を放り出す。

空中から投げ出して、そのままに任せた。

暗黒の海へと まっさかさまに。

ありつたけの悪意をこめて。

「 野郎」

吐き捨てながら、安倍は踏み出す。先に足を出し、そのまま並べる様に後ろの足を引き寄せて。地を蹴つ飛ばし、安倍は中空へとの身を投げ出した。

「死ぬ気か！ 中々良い心がけだ！ その命を皇のために投げ出せりならばさぞ良き同志になりえたりうに！」

河原崎は安倍の行為を、即ち愚行を笑つた。大いに笑い飛ばし、嘲笑つた。

安倍は宙に放り出されたまま手を伸ばす。両の手を突き出して宙を踊るがままの少女の身を引っ掴んで、抱きとめる。しかとその手に、捉える。そして互いの身は重力に引かれ、落ちてゆくことは、無かつた。

「…………は？」

河原崎の口から、おかしな声がこぼれでた。
無理もない。安倍公房の身は、木霊の少女の身を掴まえたまま完全に空中で停止していたのだから。さながら時間を停止させてしまつたかのように。

「何を驚いてる。反問の応用に過ぎん。飛び加藤をしらないか。あれと同じだ」

少年はぼそぼそと呟きながらも、片腕に少女の身を抱えこみもう片方の腕、手のひらを前に突き出した。黒い狩衣の袖からこぼれだす符術がいくつにも折り重なつて、手のひらの先端に形を為しそれはやがて巨大な剣となる。

「招来。 “ 破敵剣” 」

闇を削り出したかのよつた大太刀。それは全長にして、一三十三尺（十メートル）にも及ぶ一振りであった。

安倍が腕を持ち上げると同時、その一振りが振りかぶられる。

「ま、待て、貴様、忘れたのかッ！ 精靈種どもの暴虐を！ 人類が彼奴らによつて絶滅の危機に及んだ日々を！ それは今もなお後を引いて続いていよつー！ なぜ、貴様は、精靈などに『』する！ なぜ！！」

安倍は腕を天高くに掲げたまま、その言葉を聞き届ける。

「忘れるものか」

「な、なら

「だが、おまえは死ね」

腕が落ちると共、一刀は振り落とされた。船舶は一閃の下、真つ二つに断ち切られて海の藻屑と化す。

河原崎莊司の身は一刀の風圧に空高く巻き上げられ、海面に叩きつけられ死亡した。

居残つた反乱軍の者共は、そのことごとくを憲兵隊に押し付けての帰り路。安倍公房の背には、未だ幼い少女の身があった。安倍が憲兵隊へと少女の保護を申し立てたところ、『精靈府』からの達しによりこの少女は極秘に保護しなければならないのだという。とはいへ、『精靈府』の命より安倍や芦屋が優先しなければならないのは、直接の上司であるところの『陰陽頭』の指示である。彼への報告内容を話し合つてまとめながら、安倍と芦屋は家路を行く。

「つてつかさー」

「なんだ」

「どう思つてる？ 精靈様つてゆーの」

「……あれに何か吹きこまれたか」

安倍は芦屋に訝しげな視線を向けるが、芦屋は堪えた様子すらもなく後ろ頭に腕を組んで、少しばかり明け始めた空を見上げる。おそらく安倍がいかなる視線を送つたとして、芦屋にしてみれば「相変わらずくらいなあ」以上の感慨を抱かせることは困難極まりないに違ひなかつた。

「だつてなんか裏切り者とか言つてくんだもん。マジイラッ で、

「どう？」

「俺は好かん。……いや、嫌いだ」

「ふーん。じゃあなんで役人働きやつてんのさ」

「今になつて戦つてどうなる。もう人間は圧倒的に少數勢力だ。今ある平和を守る方が幾らか建設的だ。幸い、略奪はされてない。人権を剥奪されたわけでもない」

「はーん」

納得したのか、それとも元より興味が無いのか。ひどく曖昧な芦屋の返答を聞きながら、そして暫し無言になる。安倍はひどく口下手で、芦屋は大層な気分屋だ。芦屋が話しかけることがなければ、彼ら一人に会話らしい会話が発生することは早々無いと言つても良い。とはいへ、沈黙が苦にならない程度の付き合いではあつたが。ゆえに、次に口火を切つたのもやはり芦屋満であった。

「アタシも考えたんだけどさあー」

「……ああ」

「その子の髪いじくりたいなー。やつぱいよね。超美少女

「何の話だ！？」

「え、そのまんまだけど……なんか偉そうな服だけど、もつとふつーに可愛い女の子っぽい服も着せたげたくない？」

「……知らん」

今日も朝日が眩しい。安倍は半ば遠い目をしながら、現実から逃避する。もつとも、背に感じる重みからは逃れようが無いのだが。

人間と精霊種、その総人口は百万にも及ぶ都市国家。
精霊によつて、指し定められた都市 精霊指定都市“神都市”
は今日も概ね平和だ。

「 報告は以上です」

「うむ、」^レ苦労だった

「それと陰陽頭。密にこ報告したいことが」

「なんだい？」

「木靈^{エルフ}の少女を保護しました。これがどうも。伊予の姫君である可能性が」

「あー。向こうに不吉の星が出てたって天文博士が言つてたからね。反乱側に流されちゃったとか、皆殺しされる前に一縷の望みにかけたとかもしないね」

「……此方としてはどうすれば良いか。判断を仰ぎたく」

「あー。どうしようか……そうだな。安倍くん預かっとしてよ」

「……は？」

「芦屋くんもいるしなんとかなるよね。よし、がんばれー！」

「……ちよ、陰陽頭！ 陰陽頭イイイイー！」

安倍公房の今日は平和ではなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8211y/>

精霊の守護者

2011年11月24日14時49分発行